

好きな花

下長中学校 三年 青山 風咲

皆さんには、好きな季節があるだろうか。私は、春が一番好きだ。なぜなら、春はたくさんの草木や花に、景色が鮮やかに彩られ、美しい一つの絵画を見ているような気分になるからだ。春に咲く花といえば、桜、たんぽぽ、すみれなどがある。私の中でもチューリップが一番の好きな花だ。一年中、土の中に埋まっていた見えない球根、それから伸びてくる葉、茎。そして四月頃には見事な花を咲かせる。球根が全てを支えているという、見えないところで大きな仕事をしている。素晴らしいと思う。葉は触るとつるつるしていて、その形も美しく、脈は平行で真っ直ぐな意志があるように感じる。葉の間から茎は曲がることなく伸び、限界まで伸びると、成長の中心を花に移し、全ての器官で美しい花を咲かせようと懸命に活動する。そして、きれいな花を咲かせた後、全ての力を使い果たしたチューリップは、土に感謝するように、枯れて、土に染みこんでいく。花に注目されがちなチューリップだが、見えない土の中や葉、茎にも素晴らしい魅力があると私は思う。「花が枯れた。」と言っている人、是非、葉と茎を見てほしい。まだ生きています。それなのに、枯れたと言っては、かわいそうだ。葉と茎が枯れても、球根は腐らない限り、ずっと生き続けている。仲間を増やし、懸命に生きています。つ

まり、チューリップは、ずっと生き続けている。生き続けるのが素晴らしいと言いたいのではなく、誰にも見られていないところでひそかに努力し続けていることと、強いことが素晴らしいと言いたい。

私は、今まで何かをする度に、その見返りを求めていた。中学二年生の頃だろうか。定期考査のテスト期間中だった。そのときの私は、テスト週間でも勉強をせず、親からあきれられ、テストでも良くない成績をとっていた。だから、今回こそは、いつもより頑張って勉強した。そして、勉強部屋からリビングに戻った。私は、家族から「すごいね。」とか、「よく頑張ったね。」などと、温かい声をかけられると思っていた。しかし両親からは、

「え、もう終わったの。たった二時間だよ。」

「それぐらい当たり前だ。」

という声しかかけられなかった。私はつい、

「なんで。頑張ったのに。」

と強く言ってしまった。すると父が、

「お前は見返りを求めるために勉強しているのか。」

と言い放った。その一言に私はどきどきとさせられた。私は、見返りを求めるために勉強していない。人が見ていないところで何か良いことをして、それを伝え見返りを求める……。なんて幼稚な自分……。

「じゃあ、まだ勉強してくる。」

そう言って、再び勉強を始めた。そっきとは違う、目標のために。

少し大げさかもしれないが、私は、一年中土の中にいるチューリップの球根と、あの時の自分を重ねて見てしまう。チューリップの球根みたいで、自分もいつかそんなふうになり、強くなつて、誰かを喜ばせるような、素晴らしい人になりたい。チューリップはいつでも応援してくれている気がする。その応援に応えられるように、私が一番好きな花は、チューリップだ。